

「もっと知りたい高知県の産後ケアの実際」

研修会報告

R3年5月16日(日)に、2月に行った福島富士子先生のリモートによる産後ケア研修会の第二弾とし、高知県の産後ケアの実際をより具体的に伝えていく研修会を開催しました。

今回、当会員の藤原恵、竹崎恵、坂口結映が講師を担当し、産後ケア事業の概要と高知県内の状況を簡単に分かり易く説明し、当人達の産後ケアに至った流れや、具体的な取り組み事例、そして、土佐市の母子保健事業や母子保健コーディネーターとしての留意点などを、講演いたしました。

今回も、県内外の助産師・保健師・看護師・保育士・管理栄養士・理学療法士・看護学生と様々な職種に参加をしていただきました。

発表の後は、グループに分かれて、産後ケア事業について思うこと、母子が必要としているケアをスムーズに受けられるためには、どう周知させたらよいのかなどを話し合い、県外での取り組みなども聞く事ができました。

保育士や理学療法士など他職種の、産後の母親に関する認識やアプローチ、将来的な連携方法など活発に意見交換を行うことができました。

研修後のアンケート結果でも、多くの方が、自分の目指す産後ケアについての考え、母子の育児支援のために、今後もさらに学んでいきたいなど、熱い思いが詳しく記述がされており、その意識の高さに触発されたことでした。(HP上にもアンケートの掲載をしております。)

まだまだコロナ禍のため、リモート研修会2回目となりましたが、準備・運営には至らぬ点もあり、皆様にご迷惑をおかけいたしました。

しかしながら、皆様の協力の元、無事に研修会を開催・実施することができました。

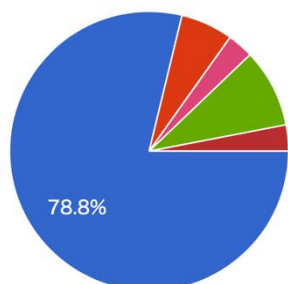
ご参加とご協力に心より感謝いたします。ありがとうございました。

一般社団法人高知県助産師会

研修担当：五島聡子

1. 職種についてお伺いいたします

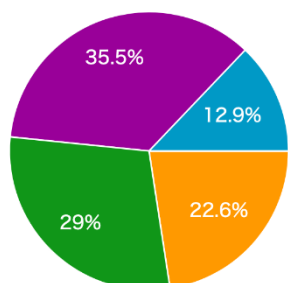
33 件の回答



- 助産師
- 保健師
- 看護師
- ソーシャルワーカー
- 臨床心理士、公認心理士
- 看護学生
- 保育士
- 理学療法士
- 管理栄養士

2. 年齢

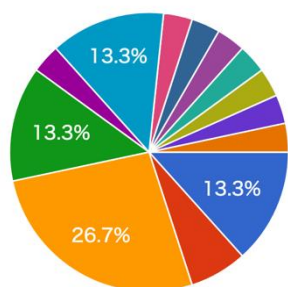
31 件の回答



- 10代
- 20代
- 30代
- 40代
- 50代
- 60代
- 70代以上

3. 所属

30 件の回答

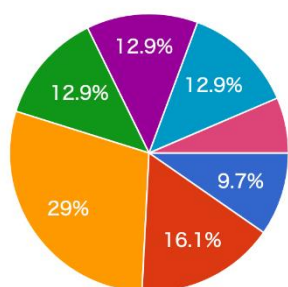


- 勤務（病院、診療所）
- 勤務（市町村、保健所）
- 助産所（訪問型）
- 助産所（施設あり）
- 無職
- フリー
- 地域で訪問
- 季節労働

▲ 1/2 ▼

4. 現在の職種の経験年数

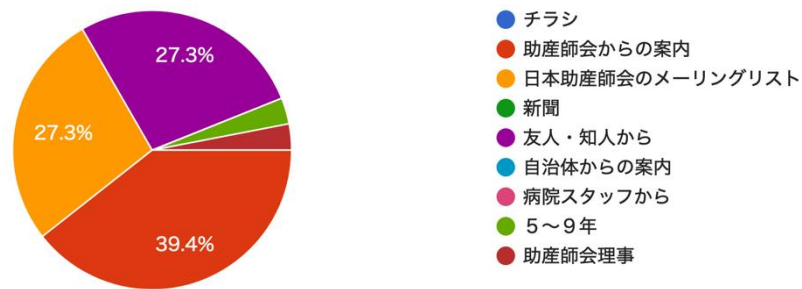
31 件の回答



- 5年未満
- 5~9年
- 10~14年
- 15~19年
- 20~29年
- 30~39年
- 40年以上

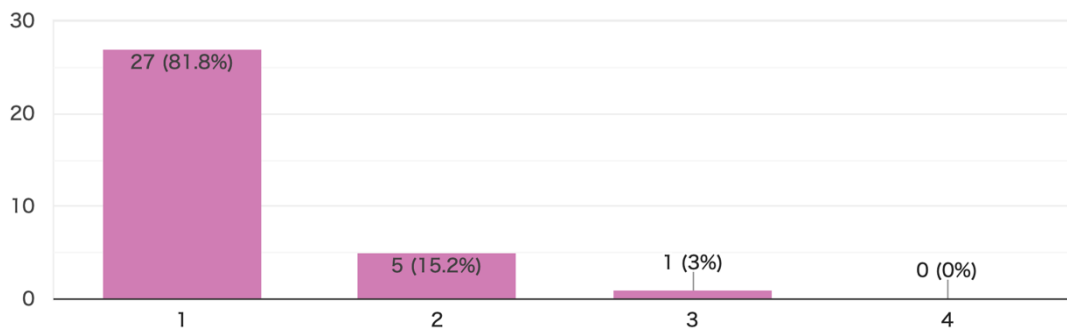
5. この研修をどこで知りましたか

33 件の回答



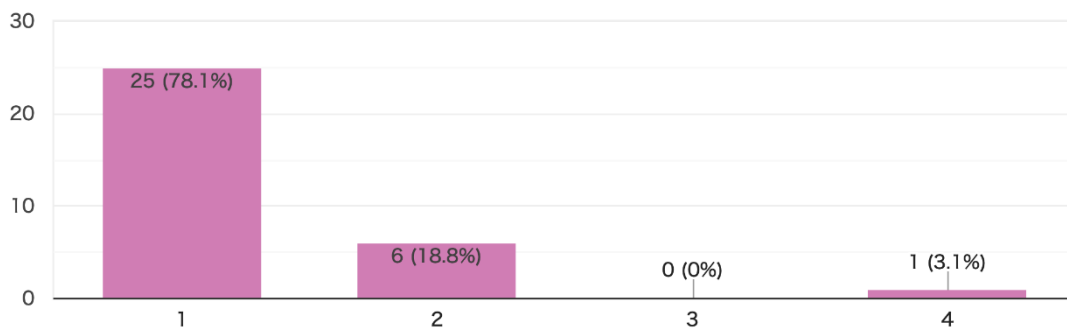
6. 研修の内容は理解できましたか

33 件の回答



7. 研修の内容は今後の役に立つと思われましたか

32 件の回答



8. 産後ケアについてあなたの考えをお聞かせください

- ・ ママの笑顔が子どもにとって家族にとって、何より大事だと考えているので、そこに繋げるケアをしていきたい
- ・ 産前ケアも含め必要不可欠であり、広めていきたい
- ・ お母さんのケアだけでなくお母さんを取り巻く環境へのケアも必要だなと感じました。
- ・ コロナ禍で制限ある妊娠・出産・産後の中、今後ますます大事な事業になると考えています。
- ・ もっと認知されて利用が広がってほしい

・産後ケアが1年間の延長にも関わらず回数制限や各自治体に任されていることが課題であると認識しました。また、産後ケアにかかわるすべての職種が母子の支援のための情熱を持っているので、支援が十分できる法体制が必要と思いました。

・多職種で母、赤ちゃんなど取り巻く環境へサポートできる状況へ。利用まで簡易かつスムーズにできるようになれば良いと思います。

・家族の協力が必要不可欠になっている。難しい場合には産後ケアを気兼ねなく申し込んでもらえるように周知していきたい。

・もっと広く、産後ケアを利用したいと思っているすべてのお母さんが利用できる事業となるべきだ。

・専門家からの支援はとてもありがたい

・産後ケア事業が、浸透し、地域により差がないようにしていくことが必要である

・地域（自治体）の状況で、サービスのあり方が異なると思うので、効果的な取り組み事例やシステム等、ぜひとも情報共有してほしい。

・全ての母子に必要なだと思います。地域で開業してやっていくためには、収入にきちんとしていけるような制度作りをしていけるように助産師会が国にかけあってほしいです。アドバンス助産師をとっても地域では報酬にはつながりません。

・産後になって、こんなはずじゃなかったという方も多いので、産後利用したい時期にすぐに利用できるしくみが必要かなと思います。あとは、妊娠中から産後のイメージができるように、産後ケアの申請もできるような働きかけも大事かなと思います。できることから一歩ずつやっていきたいです。

・産後ケアが導入されてから、4～5年たちましたが、まだまだこれから改善の余地はあると思います。産後ケアに関する研修に参加する機会が多くなる中で、貴重な意見が色々でてきていると思います。各個人でできること、制度として日本全体で取り組んでいかなければいけないことを分けて、県や国に訴えていかなければいけないなと思います。

・子育てに困っている方だけでなく、たくさんのお母さん達に利用してもらえたらと思います

・産後ケア事業には携わっていませんが、妊婦や産婦さんへの周知や、他職種との連携の部分で、関わっていきたいと思います。

・高知県としても、お母さんや家族のニーズを大事にして、産後ケア事業をすすめられていて、素晴らしいと思いました。

・産後ケアをより多くの人に気軽に活用していただけるようになることを願います。

・母親の高齢化や支援の少ない環境が多く、母親の不安や疲労を軽減し、育児を楽しく感じることで少しでも増えていけるよう支援したいと思います。現在病院での2週間検診の係を通しお母さん赤ちゃんと顔の見える関係をつくり安心感がもてる声かけや支援方法、その後の継続した支援につなげていければと思っています。

・産後ケアを必要とする方は多いがサポートする側の体制や行政との協力整っていない状態に感じます。またケアを受けたい母親のニーズをしっかり把握して行う必要があると感じました。

・沢山の母子に受けてほしい

・市町村によって産後ケアの考え方が違い、ケアの内容に格差が生じているので統一した内容になる事を望みます。また、開業助産師が保険点数として申請できるような恒久的なシステムとなる事が望ましいと思います。

・理学療法士として関わる事ができる部分（運動や肩こり腰痛に対するセルフケア方法等）を助産師さん、保健師さん等の様々な職種の方と連携しながら産後の方に届けていきたいです。

・思うようにできないと辛く感じる時期にかかわりを持つことで母の自信や自立につながる。

・母親自身が子育て（妊娠、出産）を通して、自分自身で心身メンテナンスをできるように関わることが

できたらと思います。そして一人で抱え込まないようともに身近な存在としてサポートできたらと思います。

・幼稚園や保育園、地域子育て支援センターで多くの母子、家族の方に出会いました。子どもが心身ともに健やかに育つことを願う時、家族、両親、特に母親の心身の健康が欠かせません。一人一人異なる悩みや困りごとを聞かせてもらうにつけ、早期に出会うことで、母子が安心して過ごせる支えになる必要があると強く思うようになりました。当初は新生児のうちにと考え、保健師と連携して母子支援に携わることで、同時に、地域子育て支援センターを妊娠期から利用できるように受け皿を広げることによって、多くの産前産後の母子と出会う機会を作るよう努めてきました。退職後も、自分にもできる必要なお手伝いはないだろうかと思い、願っています。こういった意味において、産後ケアに取り組むことは、心身ともに健やかな子どもの育ちや親子や家族の関係性の良好な構築、ひいては虐待予防にもつながり、次世代のより幸せな子育ての在り方につながると考えています。

・母が安心して育児ができるよう支援する

・全ての人に必要なものだと思います。特にコロナ禍だからこそ、家族への声かけをしようと思うと、産後ケアでじっくり行うのがよいと感じています

9. 切れ目のない母子の育児支援を行うために今後学びたいと思うことはなんですか

- ・地域や他職種との連携。
- ・子育て包括支援センターに関する切れ目のない支援
- ・夫婦関係のケアについて
- ・家族へ向けた周知の仕方、地域で活動している助産師さんの状況、各自治体での取り組みの仕方など
- ・家族支援、メンタルヘルスケアについて
- ・寄り添う・傾聴について。
- ・いろいろなお母さんがいらっしゃるのので、どの方にも寄り添えるような傾聴についての学び
- ・面接技法
- ・それぞれの施設・部門での母子支援の役割や関り
- ・妊娠中の支援（産後のイメージづくり）
- ・母乳育児支援における乳頭保護器等デバイスの使い方について
- ・具体的なケアの内容（母乳支援・育児支援・メンタルヘルスケアなど）を、学んでいきたいと思っています。自分自身の考えや繋がり方を広げて行きたいと思っています。
- ・月齢ごとのサポートの変化に関すること
- ・コロナ禍で、地域とのつながりがより薄くなったりする中で、児童虐待予防とそと、助産師としてできること、地域・行政との連携について今後、学びたいです。
- ・今回のように、助産師の活動報告を伺いたいです。
- ・病院勤務で地域での活動が把握しにくいので自己学習や地域の産後ケアに関わる方と意見や情報交換を続けていけたらと思います。
- ・産後ケアへのニーズは高いが、料金が高く利用することが難しい現状があります。まず、自分の住む行政や病院での産後ケアについて具体的な内容を把握し助産師同士での状況を共有すること。その上で、行政にどのように働きかけたらいいのかを高知市を参考に私の自治体でも取り入れて行けたらと思います。

10. ご意見・ご感想をお願いいたします

・とてもためになった研修会でした。他県でも参加できたのはオンラインの恩恵と感謝しています。高知県助産師会の今後のご発展を祈念いたします。

・いろいろな方と交流できてよかったが、PCを通しての交流なので聞きづらい箇所がある。
・あきらめずに、母子へのケアの意志をあたためて、形にしていこうと強く思いました。有難うございました。

・他の県の助産師さんと、話ができてよかった
・産後ケア実務者研修等、登録従事にあたって必須要件等あれば、教えてください。
・他県や他職種の方の参加もあり有意義でした。
・第二弾という事で、少し具体的なケアが身近に感じて、わかりやすかったです。まだまだ課題はあると思いますが、お母さんたちのニーズを、しっかり受け止めて、ケアに参加したり、行政への働きかけを行っていきたいと思います。

・グループワークなどもあって、色んな活動をきけて本当によかったです。
・母子支援に関わる方からの思いを伺うことができ、自分自身の活動のモチベーションアップにつながりました。

・今回の研修は、病院で業務をこなしているため、他県での様々な問題点や産後ケアの進みに違いがあることに驚きました。病院勤務している助産師にとって今後何ができるか考えさせられました。

・新生児訪問では、育児不安（授乳について、沐浴や赤ちゃんの世話）自分の身体的不調の訴えが多いため、母親それぞれに合わせてケアすることで育児への自信を育めるように関わりますが時間が不足してしまう現状があります。産後ケアも料金の問題から活用できない状況を改善し、安心して子育てできる様な仕組みを作っていきたいと思いました。

・産後ケアの事例をご紹介いただき、実際にどのようにされているかイメージできよかったです。段階を追ってセルフケアができるように導けるので、複数回関われることは大切なように思いました。今回いろいろな職種や他県の方と交流ができました。今後も多職種で連携していけたらよいなと思います。

・他県の産後ケアの事例、実態を聞かせていただき長崎県だけでなく、まだまだ進んでいないんだと思い、これからも助産師として出来ることをやっていきたいと思いました。

オンラインで他県の参加できたことに感謝しています。今日、事例、報告して下さったかた、司会進行役、高知県の助産師会の皆様、このような機会をありがとうございました

・高知県の産後ケア事業はまだまだ市町村によって温度差があるのだということを感じました。

私は、主にバランスボールを使用した産後のお母さん達の運動教室や、産前産後での身体の変化の話、セルフケアの話などをお伝えする教室を開催していますが、その中で参加者のほぼ全員の方が身体や心に不調を感じています。そう言ったお母さんたちの相談窓口の1つとして、選択肢の1つとして、産後ケア事業の利用ということ選択が当たり前に出てくるように、内容の充実や認知度を向上していくことができれば良いと感じました。

理学療法士の私が何かできることがありましたらお声がけください。

・産後ケアの概要はあっても実際に行っている事例が聞けて参考になりました。疑問点は皆さん同じであることにほっとしました。これから実施していくうちに他の疑問や悩みが出てくると思うので、産後ケアのその後を研修会でしてほしいです。参加して満足です。

・病院勤務の経験しかなかったので助産師として地域で何ができるかなと思いながら日々過ごしています。今日は、色々な意見を聞くことができ、同じように母子活動されていたので勉強になりました。

・第1回目も今回も、助産師会主催の研修会に他の職種の参加も認めてくださって、本当にうれしく有難く思いました。助産師会の皆さんの今後を見据えた広い視野と観点による研修会に参加させていただいたことで、高知の産後ケア事業について、ますます、ともに学び、母子の笑顔のためにできることをしていきたいという気持ちが強くなりました。

・藤原助産師さんのパワーポイント内容、GWまとめと一緒に資料としていただけませんか？R3.2月

の福島先生の研修が受けられず残念でしたが、今日は高知県の皆様からのお話を聞くことが出来て学びとなりました。

・今日はありがとうございました。事例も聞いて良かったです。体重増加が良すぎるので、過飲症候群でうなる&臍ヘルニアもあったのかな・・・と思いました。

他、労い、感謝のお言葉多数ありました。

グループ交流会のまとめ (R3.5.16 産後ケア研修会)

参加者 46 名

7 グループ (6~7 人) に分かれ、それぞれのグループで交流。

勤務助産師・開業助産師・大学勤務助産師・市町村役場勤務助産師・地域訪問や教室担当助産師をはじめとし、看護師・保健師・保育士・理学療法士・管理栄養士が参加。

産後ケア事業について思う事

(産後ケアについての、周知の差がある)

- ① 地区によって産後ケアの受け止め方に温度差があると感じる。行政は、赤ちゃん訪問と産後ケアの違いがないと感じている。周知の仕方に差があるため予算がつかない。産後ケアは、行政の支援で、少しでも安く受けられる方が良い。
- ② 産後ケアに、行政の方から入ると、地区によって違いがある。1 年待っても申請が来ない場合や、逆にたくさん申請があり過ぎて、そんなに多くなり過ぎないようにと言われたこともある。本当に必要な人が受けられるように (誰でも受けられるものにはならないように) 調整が必要。申請して受けている人数には、地区で差がある。周知の仕方も影響している。
- ③ 助産師の考える産後ケアと、保健師が考える産後ケアにも差がある。共通認識を持つ必要がある。
- ④ 産後ケアの発展に向けて、利用者の声を活かす必要がある。産後ケアを受けた方の大半が満足している。
- ⑤ コロナ禍で、病院の面会制限により、家族 (支援者) に産後の大変さが伝わっていない。とにかく休めるように伝えるよう心がけている。また、近くで頼れる産院 (乳腺炎発症時に処方してもらえる病院) や夜間救急の連絡先なども伝えている。母親だけでなく、父親や祖父母などへの周知も必要。
- ⑥ 広島県の産後ケアは、ハイリスクの人は活用できるが、リスクのない母親は審査が厳しく利用できない。自宅のホテルを改築して始めた助産師がいるが、リスクのない母親は、1泊3万円と利用料が高く、利用者が少ないため経営が成り立たない現状がある。どうしたら周知してもらえるのか、何から始めればいいのか。
→高知県でも2年かけて保健師と一緒に、病院へ産後ケアのシステムについて説明に伺い、理解してもらえるように努めた。まずは、病院に知ってもらい繋げてもらうことが大切。保健師と連携を取っていくことも必要。

- ⑦ 母子手帳の発行で関わり、特定妊婦や母のキャラクター、支援者の有無などをフォローしていきながら母子保健に携わる他の職員とも相談しつつ、最終的に気になる対象に、産後ケアをすすめていっている。

(ケアの内容、利用料金について)

- ① アウトリーチ型の産後ケアを、システム化していく方向で話し合いは進んでいるが、産後ケアは母親の自立に向けてのケアなので、赤ちゃんを預かったり、助産師サイドで沐浴をしたりということはしない方がよいという意見があるが、実際どうなのか？

→それぞれの養育者で、必要なケアやニーズは異なるため初回の訪問から、育児指導をした方がよいケースもあれば、預かって休息をとってもらふこともある。

本人のしたいことをしていただくことがケアになりうるケースもあるので、ケースバイケースである。実際に4回の産後ケア訪問を、すべてシッターのように預かりその間、利用者は睡眠をとるといったケースもあった。しかしながらその訪問の後、市の育児相談に出てこられるようになったり、子育て支援センターの利用につながったりと、その方なりのセルフケアにつながっていった。システムづくりの話し合いの中で、そのような意見を伝えて、提供するケアについて話し合いをもっていく必要あり。

- ② 市の助産師として母子を訪問する機会はあるが、その時に、どこまで無料でケアを提供していいものなのか悩む。産後ケアはまだシステム化できていないが、地域の開業助産師よりも安い料金でケアを提供するにあたって、看板をあげて開業している助産師からモヤモヤしたという想いを聞くことがある。

→市の訪問で必要だと判断したときに、提供できる最大の支援をするべきなのではないか。開業の助産師については、やはり国としての制度化がなされて正当報酬が得られるような仕組みが必要な気がしている。アドバンス助産師をとっても地域の助産師は報酬にはつながらない。ただ、助産院の事業と、市町村の事業については分けて考えることは大切かもしれない。市の産後ケアについては、回数も制限されているためその後に、地域の助産院と連携する必要性があれば連携していくなど、情報提供していくことが、養育者の自立へと繋げていくことの一つなのかもしれない。

- ③ 県外の産後ケア報酬や日程調整などが、どうなっているか気になっている。自分のところは、産後ケア利用者は、おそらく母子手帳の全数面接からの流れがあり、妊娠中から申し込みを済ませている方が多い。アウトリーチ型は、市から依頼があったら、直接母親と日程調整をし、半分を市が補助し、自己負担の半額をいただく(3000円)。非課税所得者は自己負担の部分をさらに上の府が負担してくれるが、その手続きが煩雑。宿泊型(1泊9000円)デイケア型(4500円)は、母子コーディネーターが日程調整。

→土佐市は宿泊型と日帰り型は、施設と契約したばかり。アウトリーチ型は、助産師会と契約し、1件11000円(多胎加算5000円)で支払い、ケア者には手数料が引かれて振り込まれている。

- ④ エジンバラ質問票はどのようにしているか？

→妊娠中、産後2週間健診、1か月健診で取っている。同じ内容の繰り返しになるので、産後ケア訪問では取っていない。エジンバラ質問票に関して、大病院では高得点であった方も、継続連絡票がなかなか上がってこないためサポートが必要な時期に間に合わないこともある。

- ⑤ 助産師から見て、保育士が産後ケアでどのような関わりをしたらいいと考えるか？

→産後ケア期間が1年になったことから、宿泊ではハイハイをしたり歩いたりする子を受け入れるには施

設的に無理であり、4か月までとしてもらっている。訪問でも1年までで一人の助産師がお母さんと子どもを見るのは難しくなる。他県では保育士同伴訪問を行っているところもあると聞く。高知県もそのことが今後重要だと思う。

保育士は子どもをみる専門職。産後ケアの中でも乳児各期の子どもを見ることや親子の遊び、コミュニケーション技術を伝えてもらうことなどで、お母さんの子育ての手助けになる。

⑥ 保育士、理学療法士は、どのような場面で産後の母親をピックアップしているのか？

→保育士、理学療法士は、現在助産師とともにデイケア産後ケアの立ち上げに携わっている。バランスボールの教室でお母さん方と話をする中で、アプローチの必要なお母さんを見つけ出し、ケアにつなげている。保育士は「地域子育て支援センターとの協議」で行政との話し合い、状況で同伴訪問も行われる。産科診療所助産師は2次医療機関・3次医療機関を経験しており地域とのつながりの必要性を強く感じている。

回数を1~2回でなく、もっと増やして、対処する内容により、助産師+保健師、保育士、理学療法士との同伴訪問など登録した他職種が必要に応じて訪問できるような産後ケアセンターが設立出来たらよいと思う。

⑦ 理学療法士は、産後の方にどのようなアプローチを行っているのか？

→尿漏れ。マイナートラブルなど産後の身体の不調を「こんなもの」と後回しにせず、体を整えお母さんが笑顔で子育てができるように専門的に身体をみて、アプローチを行えればと思う。実際に身体に触れて、骨盤底筋群へのアプローチも一緒に行うことで産後の身体の回復に繋げていく。

理学療法士として、産後の母親のリフレッシュやセルフケアを行える場所を提供し、心と身体のケアを行っている。その中で、必要な母親に、産後ケアに繋げていきたい。

⑧ 母をまるごと受け止めることが大事。2週間、1ヶ月までは病院でフォローしてくれるので、そこから4か月健診まであくところまでの困りごとに対処している。

(連携の仕方について)

① 新生児訪問（赤ちゃん訪問）から、産後ケアに繋ぐいい流れはどうしたらいいのか？地区担当の者が行く方がいいのか？自己負担金などが出る方がいいのか？スムーズに流れるケースはどんな感じか？この人は受けた方がいいと、どのようにすすめているのか？

→高知市の場合、妊娠8か月から産後ケアの申し込みができる。実際、申請して受理されているにも関わらず、産後に困難感がなく利用されないケースもある。赤ちゃん訪問で専門職（高知市の場合、訪問は看護師、助産師、保健師の3職種が担当）が見て、産後ケアの必要性を感じ申請した場合は、ほぼ実施されている状況。

病院として宿泊型産後ケアを受け入れているが、最長10泊まで可能であるが、ほとんど1泊の利用。申請の手続きに手間と時間がかかるため、利用につながりにくい現状がある。パパママ教室を通じて宣伝しているが、コロナ感染の影響で、難しい。

自己負担金も、各自治体により違うかと思うが、高知県内は課税世帯で、訪問1回1000円、非課税世帯は0円となっている。産後ケアが4か月から1年に延長されたが、高知県では、まだ4か月超えての利用はない。料金は課税世帯で、訪問1回1000円、宿泊型は1泊3食8000円、その後1泊追加ごと大阪では、産後ケアセンターを設立し、産後ケアを実施しているが、ハイリスクの方が多し、コロナ感染拡大のため地域での支援が困難な状況。利用に4000円が必要。

② 新生児訪問と産後ケアの連携・継続、訪問後はどうなっているのか？

→新生児訪問でリスクを感じた時には、担当保健師に報告して、保健師から訪問継続や産後ケア利用をすすめるなどしてフォローしている。

③ 赤ちゃん訪問の中で、授乳や夜寝られないといったお悩みは多いので、そのようなケースには産後ケア事業をお伝えするようにしているが、利用につながっているのか自分にはわからない。またお伝えしても利用には至らなさそうな方もいる。どのようにお伝えしていけばよいのか聞きたい。

→産後ケア自体がどのようなものか説明してもイメージがつかない方もいる。またこちらが必要だと思っても対象の方が必要と思うかどうかはわからない。訪問して必要そうだったら情報提供していただけたらいい。市の保健師さんにその旨を伝え連携をとっていくことが大切。

④ 県外では産後ケアの自己負担金が高く、また、赤ちゃん訪問が2回あり（新生児期に1回、1か月健診後に1回と、できるだけ早期から介入）しているため、産後ケアの需要がない。産後ケアの必要性や自治体との兼ね合いが今後必要になってくる。

⑤ 病院からの連携も重要。病院勤務をしている中で、その後大丈夫だろうかと思われる産婦さんがいるが、早期から産後ケアに繋がることで、病院サイドとしても安心できる。

⑥ 埼玉県では、1泊3万円と高く、利用者が少ない。利用したくてもできないので、どうしていけばいいか。母親の代弁者として行政に、利用したいが高くて利用できない状況を伝える。市町村と連携できる関係づくりを行う事が必須。

(今後の課題と感想)

① 理学療法士として、産前産後ケアに取り組んでいけたらいいが、産前産後のリハビリは、現在点数がとれないため、病院で取り組んでいくのは難しい。対象者と訪問助産師の了解が取れたら、同行して見学する機会などあればありがたい。看護師とは違った視点での情報提供ができると思うので、連携していきたい。

② 産後ケアセンターが設立できれば広い意味でお母さんの助けになる。自治体の財政状態や考え方で左右されるので差が出てくる。予算もないといわれるが、言い続けることが大切だと思う。

③ コロナ感染の影響もあり。産後ケアの利用をすすめたいが広がっていない現状がある。

④ 妊娠中、妊婦健診時から、産後ケアに繋がる連携があればニーズに合った産後ケアになる。

⑤ 今日の研修で、産後ケアの概要はわかったが、事業計画もできておらず、何から始めていいものか、右も左もわからない状態。

⑥ 2人目の育児休暇中。産後の大変さもリアルに感じている。自分も対象でありながら産後ケアというのが今一つ浸透していないという印象のため、最近の流れを知りたくて学びに来た。

⑦ 研修会を通して、改めてコミュニケーションのあり方について学べた。

*研修会・グループ交流会に参加の皆様、ご参加ご協力をありがとうございました。

司会・発表・記録とお世話をお掛け致しました。心より感謝申し上げます。

高知県助産師会：記録 宮地絵里